

言葉が人に届くとき

会員 有園 洋一



このエッセイが掲載されるのは12月号らしい。昨年12月のある晩、弁護士登録をして間もない頃、私は敬愛するK弁護士と代々木上原にある焼鳥屋にいた。賑わう店内で席に着き、さぁ乾杯というタイミングで、K弁護士がいつもの落ち着いた口調で話してくださった。いわく、登録1年目の頃、ご自身が弁護士に向いていないと感じ悩んでいたという。

このお言葉にはとても驚いた。K弁護士は入管収容問題の分野で長らくご活躍されており、その情熱、冷静な視点、軽快な行動力、豊富な経験、そして粹なお人柄は、たくさんの人々を惹きつけており、まさに弁護士の鑑のようなお方なのだ。そんなお方が向いてないと悩むとは。もちろん、誰でも何事もはじめから上手くいくわけではない。しかし、「向いていない」という感情は、例えば、努力が及ばず、経験を積んでも乗り越えられないと思える場面で生じるものである。K弁護士が向いていないのであれば、一体どんな人が向いているのか疑問であるし、仮に新人であったことを差し引いても、そこまで思い悩んだとは想像できなかったのである。

あれから1年、私は幾度となく自分は弁護士に向いていないと感じてきた。依頼者との程よい距離感に苦心し、弁護士（人）としてしかるべき立ち振る舞いがわからず、相手方当事者や事件関係者にむやみに同情したり、依頼者の利益を目先だけで捉えたり、良かれと思ってやったことが裏目に出ることもある。次こそはと思っても、また空回りし、達成感とはほど遠い日々を過ごしている。私はどちらかというとおめでたい性格で、基本的に万事なんとかなると思って生きてきた。今もどこかでそう思っている。しかし、そんな私でも弁護士業の奥深さを垣間見る度に自分は本質的に向いていないのかもしれないなどと落ち込んでしまうのだ。

そんな私をいつも支えてくれるのが、あの晩の言葉である。あのK弁護士ですら感じたことだから、自分が悩むのは当たり前ではないか。向いていないと思うのも仕方ないと、良い意味で諦めがつく。素早い気持ちの切り替えが不可欠な弁護士業務の中で、あの言葉に何度救われたかわからない。あのとき何気なくかけていただいた一言が、時を経て私を救ってくれている。

私達は言葉で仕事をする。何を話すだけでなく、いつ、どのように話すかまで常に気を配ることがとても大事だ。これはボスから学んだ大切な教えの一つだ。

今にして思えば、K弁護士は見事にその手本を示してくれていた。K弁護士はあのとき、新人の私がその後ぶつかるたくさんの壁を見越して、あのお話をしてくださったのだろう。しかし仮に正面からの訓示として「初めは色々大変だけど頑張れよ」であったならば、（もちろん大変ありがたいお言葉ではあるが）きっと落ち込んだ私の心にそっと寄り添い、すぐに立ち上がらせてくれるほどの力は持たなかったであろう。

K弁護士ご自身が感じたこととして聞いたから、飲み屋で何気なく話されたから、私が壁にぶち当たる前だったから、私が憧れの眼差しを向けているから、いろんな要素が相まって、後から染みる「時間差いい言葉」として届き、その後の私を支えている。

私も、仲間に対して、依頼者に対して、何気ない言葉だけど、本当に必要なときにふと頭によぎり、その人を支え続ける「時間差いい言葉」を届けられるようになりたい。

もっとも、いつ、どこで、どのような話し方が望ましいかは、事柄の本質を理解して、相手の目線に立ってこそ見えてくるものだと思う。弁護士として、人として、これからも自己研鑽を続けたい。